夢の花

伊藤さた女

夏草叢書
45

著者略歴

明治32年1月　秋田縣に生る。
昭和5年　夏草入会。
昭和34年　夏草同人。
昭和43年　夏草功労賞受賞。
（俳人協会々員）

夏草叢書 45
句集 **莖の石**

昭和五十四年十一月二十日　発行
著者　伊藤さた女
世田谷区船橋一ノ一ノ九
印刷
製本　和光堂印刷株式会社
江東区常盤二ノ十四ノ五

〔頒価　二〇〇〇円〕

序にかへて

隅田村とある地圖壁に櫻餅　34年

向島長命寺の櫻餅、近頃さつぱり行かないからどうなつてゐるかわからないが。この春、百花園で句會を催した時、とつてもらつて食べた、昔のやうに葉が三枚も四枚もで包んであつて懐しかつた。

その櫻餅屋に行つて見ると壁に昔の地圖が貼つてある。この向島のあたりは隅田村といふ村であつたのだ。田圃で近くに三圍神社もある。梅林などもあつて、よく騒人墨客の訪れるところであつた。

隅田村といふ地圖――なかなか面白い。

古着市刺子の虎に霙降る　35年

どこか下町あたりの古着市、いろんなものが並べてある、その中に刺子の半纏？がある、むかし鳶職などの勢のよい者が着たものだが、それには虎が織り出してある、これはまたいよ〳〵威勢がよい、黒い地に白く虎が出てゐる、どんよりした空は雨になつた、雪さへまじへて来た、この古着市——野天ではないかも知れないがすぐ、霙がかゝるやうな店先に並んでゐる刺子のやうに思はれる。

古風な材料だが、決して古い感じがしない。

十人の子居てもさびし秋の風　35年

子供十人、その中には男もあれば女もある、丈夫な者もあれば弱い者もある、そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れぞれに成長、それぞれの性格をもつてゐるわけだ。親としては誰を愛し誰を愛さないといふわけのものではない。成人しては獨立し、結婚し、家を去る――かうなると親は手離すことを淋しいとも思ふであらうし、他人といふものも入つてくるし、たゞ一手に世話してゐた時とは違つたものであらう、かうなると十人の子供がゐてもさびしいと思ふこともあらう。秋になつてものみなあはれを誘ふ時である。

ふとしたことからさう感ずることもあらう。この作者はほんたうに十人の子福者である。實際に育てて見て初めて感ずることであり、言へることである。今日十人の子供をもつてゐるといふことの驚きと、それであつてなほさびしいのかといふ感情、さういふことが鑑賞者に興味を與へるのである。

白粉花咲き村の隅々まで魚臭　36年

白粉花は紅、白、黄などあるが、夕に咲いて、朝にしぼむ、緣先でも台所口でも

どこでも育ち、親しい花だ。

漁村の夕の風景であらうか、まだ暮れ切れない、花の色もわかる。漁村を散歩した、あるひは車で通つた、村中どこへ行つても魚くさい、そこここに白粉花が咲いてゐる。白粉花——と言はれると、人の色香さへ連想出来る、それと魚臭とをつき合せたところにある面白さが出てゐる、漁村を詠み得たと思ふ。

日輪を雲閉ぢてよし萩日和　37年

萩がよく咲いた、けふはすこし雲もあるがよい天氣だ。いま萩の前に腰かけて、じつと眺めてゐる。しなやかにまたこまやかにしげる細枝にこま〳〵と日にかがよふ紅紫の花、まことに美しいと思ふ。ふと日がかげつた。いつの間にか雲が来て太陽を覆ふたのである。いままでちかちか輝いてゐた花がこんどはしつとりした、落

ついた美しさに變つた。花ばかりではない、葉も枝も陰影が出て、深さが出て来た。

また日が強いことは必ずしも快適とは言へない。時に太陽を薄雲がとぢこめるといふことも却つて心が落ちつくこともある。萩日和と言つてもよいほどさうした穏やかな快適な日和だつた。

瀧裾の淺きを這うて海なき子　39年

東京の北郊王子に名主の瀧といふ人工瀧がある、昔から名所になつてゐて、遊び場の少なかつた都人士がよく出かけたものである、私は學生の頃行つたきりだから全く變つてしまつたと思ふが、今に殘つてゐる。

瀧壺といふ言葉があるが、これは何か深い感じがあるが、瀧裾は何か淺くひろがつてゐる感じがする、實際この作り瀧は自然の瀧とは違つて壺はなく、水が岩の面

どこでも育ち、親しい花だ。

漁村の夕の風景であらうか、まだ暮れ切れない、花の色もわかる。漁村を散歩した、あるひは車で通つた、村中どこへ行つても魚くさい、そこここに白粉花が咲いてゐる。白粉花——と言はれると、人の色香さへ連想出来る、それと魚臭とをつき合せたところにある面白さが出てゐる、漁村を詠み得たと思ふ。

日輪を雲閉ぢてよし萩日和　37年

萩がよく咲いた、けふはすこし雲もあるがよい天氣だ。いま萩の前に腰かけて、じつと眺めてゐる。しなやかにまたこまやかにしげる細枝にこま〴〵と日にかがよふ紅紫の花、まことに美しいと思ふ。ふと日がかげつた。いつの間にか雲が来て太陽を覆ふたのである。いままでちかちか輝いてゐた花がこんどはしつとりした、落

庭にぼたん雪が降つてゐる、室の中には美しい書架がある、女の書齋。

夕虹の帶松島の海に解く　46年

松島に遊んだ時の作。四、五時間列車にゆられて宿に落ち着いてやれ〳〵と思ふ、もう夕方だ。すぐ前に松島の風景が展開する。空にうつすらと虹が出てゐる。沖に夕立があつたのかも知れない。

浴衣にでも着かへてくつろぐのであらう、帶を解いた。虹のかゝる松島の海を前にして帶を解くといふことは大變美しく優艶である。旅の情景も出てゐる。

以上オーソドツクスの解釋だが、もしこれを「夕虹の帶」とつづけて帶を夕虹に見立てたと解することも出來る。さうだとすれば優艶でなくて妖艶とでも形容すべき情景になると思ふ。

仙人掌の篦春潮の忘れもの　47年

このサボテンはうちはサボテンであらう。篦のやうなものがべたべたくつついて出來てゐる。私も育てたことがある。

鉢で、私くらゐの丈に大きくしたが、根をくさらして枯らした。篦を土にさすとすぐつく。篦サボテンといふ別名もあつたかと思ふ。

濱邊を歩いてゐると波がもつて來ておいて行つたサボテンの篦が一つ青々と落ちてゐた。外のものと違つてちよつと珍しい、たとへ芥と一緒であつても拾ひ上げてもよいくらいだ。ここでは芥などと一緒でない方が印象的だ。こんなところにこんなものがある、これは春潮が忘れて行つたものだと思つた。いちがいに春の潮はやさしいものとは言へないが、やさしく、美しく、しづかなものと思へる、その波がおいて行つた、しかも忘れておいて行つたものだ、かう見ると懐しく嬉しかつた。忘れ物と表現したことが句をよくしてゐる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ひこばえやいのちの森の切株に　48年

「いのちの森」が重要な言葉だが、同時に難解であらう。しかし、私には多分かうであらうといふ想像がついた。啄木が澁民で代用教員をしてゐた當時のこと、裏山によく子供を連れて行つたり、自分も一人で行つては遊んだり、思ひに耽つたり、心を慰めたりしてゐた。自らここの森を「いのちの森」と呼んでゐた。この作者もかつて私と一緒にここに遊んだことがあり、このことを知つてゐるはづだ。

かうわかつて見ればこの句の解釋もむづかしいことはなく、句の面白さもわかると思ふ。啄木にゆかりの場所と知らないで解釋しようとすると「いのちの森」の根本的な解釋操作から始めなければならない。作者としてはやはり前書をつけて鑑賞者にすなほにわかつてもらふ方がよいと思ふ。

山口青邨

目次

序句……山口　青邨
序にかへて……山口　青邨　i
春聯　昭和五年―昭和十五年（在満時代）……五
さくら餅　昭和三十二年―昭和三十六年……一五
萩日和　昭和三十七年―昭和四十年……四五
藤房　昭和四十一年―昭和四十三年……八一
ぼたん雪　昭和四十四年―昭和四十六年……一三
金婚の旅　昭和四十七年―昭和四十八年……一六七
跋……古舘　曹人　二一五
あとがき……二三七

題字　山口　青邨

莖の石

春聯

在滿時代

昭和五年
昭和十五年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com